

じっくり時間をかけた自力解決からアウトプットへ

十分な自力解決の時間

「一人も取り残さない授業」にするための3本柱の2つめが、「アウトプット」です。学習課題が把握できたら、まずは一人一人に考えさせるために、自力解決の時間を取ります。じっくり考え、考えたことを書くようにします。したがって、2～3分ということはありません。じっくりと十分に時間をとるようにします。

授業者は、この間に机間指導をします。つまりいている生徒を支援し、よくできている生徒に対しては、どこが優れているのか、具体的に称賛します。さらに考えさせるために、Aレベルの問いかけをすることも必要です。そして、意図的指名のために、生徒の記述内容を把握しておくようにします。

自力解決からアウトプット

生徒が、自分の考えを書いたら、それを発表させます。ペアでもグループでもいいでしょう。全体でもかまいません。考えたことは、書いたり、話したりしなければわかりません。これが、「アウトプット」です。今年度は、このアウトプットに力を入れるようにします。

全体で発表させる場合には、授業者のコーディネートが必要になります。ある生徒を指名し、発表させる。また違う生徒を指名し、発表させる。このような発表のさせ方は、お勧めできません。このようなことをしている限り、生徒の発表力は上がってはいきません。考えが広がったり、深まったりすることは期待できません。

指名は、挙手指名と意図的指名を組み合わせるようにします。また、一人の生徒の考えに対して、他の生徒の考えを聞くようにし、一つの考えを膨らませていきます。このようにして、コーディネートをしていきます。生徒一人一人の考えが、変わっていったり、深まっていくことが重要です。

発表させる際には、単語ではなく、文や文章で話すように指導します。「〇〇は〇〇です。なぜなら、〇〇だからです。」「〇〇から〇〇だと考えました。」「〇〇さんの〇〇という意見につけ加えると、〇〇となります。」「〇〇さんは、〇〇と言いましたが、私は、〇〇だと思いました。」ぜひ、世の中で通用するような発表のさせ方を身につけさせてください。

話し方を指導したければ、討論を仕組むのも有効です。パネルディスカッションやディベートなどを使って、改まった場を設定すると、生徒は、話し方をマスターしていきます。

教材研究と学習課題・発問

自力解決からアウトプットへと進めるかは、学習課題や発問の良し悪しにかかっています。すなわち、教材研究の問題です。教材研究の深さなどは、学習指導案の1枚目を読めばわかります。教材観、生徒観、指導観などに如実に表れます。また、それは、本時のねらいを見てもわかります。学習課題を見ても、一目瞭然です。

今年度の研究は、この「アウトプット」が生命線です。生徒に発表させる場を保障することで、生徒を変えていく研究です。生徒が話せるようになる研究です。すなわち、「生徒を変える現職教育」です。